

報 告

SD法を用いた脳性麻痺児及び進行性筋疾患児の映像視聴による 学生のイメージ変化の測定

櫻木 理恵¹⁾, 稲田 勤¹⁾, 光内 梨佐¹⁾, 吉村 知佐子¹⁾, 池 聡¹⁾, 土居 奈央¹⁾
高地 正音²⁾, 石川 裕治¹⁾

Measurement of student's image change due to video viewing of cerebral palsy children and
progressive muscular disease children using SD method

Rie Sakuragi¹⁾, Tsutomu Inada¹⁾, Risa Mitsuuchi¹⁾, Chisako Yoshimura¹⁾, Satoshi Ike¹⁾, Nao Doi¹⁾
Masato Kochi²⁾, Yuji Ishikawa¹⁾

要 旨

本研究では、脳性麻痺児と進行性筋疾患児に対する介入場面の映像を視聴させることによって、学生の障害に対するイメージに変化が生じるか否かについて検討した。脳性麻痺児及び進行性筋疾患児の訓練の様子を視聴する前と後で、SD法による形容詞対尺度構成を用いて測定を行った。結果、視聴前イメージと視聴後イメージでは、「陰気な－陽気な」「嫌いな－好きな」「苦しい－楽しい」「消極的な－積極的な」「不愉快な－愉快的な」「弱い－強い」「激しい－穏やかな」「不活発な－活発な」「暗い－明るい」「悪い－良い」「かたい－やわらかい」の11項目において有意差を認め($p<0.05$)、視聴後は、「陽気な」「好きな」「楽しい」「積極的な」「愉快的な」「強い」「穏やかな」「活発な」「明るい」「良い」「やわらかい」イメージが強くなっていた。

また、イメージ変化量と視聴前イメージとの間には、「不愉快な－愉快的な」「弱い－強い」「嫌いな－好きな」「醜い－美しい」を除く全ての形容詞対において有意な負の相関を認めた。以上より、重度運動障害児に対する介入場面の視聴は、よりポジティブな方向へイメージを変化させるものと考えられた。特に、ネガティブなイメージが強い学生においてその効果が大きいことが示唆された。

キーワード：重度運動障害児，映像視聴，イメージ変化，SD法

【はじめに】

青戸ら¹⁾は、「時代によって、障がい者に対する偏見差別意識が変遷しつつある一方で、依然として障がい者に対してネガティブなイメージを持つ人がいることも否めない事実である」と述べている。運動障害者のイメージが正しく伝達されにくい要因について稲田²⁾は、「重度脳性麻痺患者の中には、筋

緊張や不随意運動亢進により、自分の気持ちを表情や動作姿勢で相手に伝えられない」、「ALS患者では、病気の進行とともに運動機能が低下し、会話が困難になるだけでなく、表情筋も麻痺する場合がある」などのように、障害者からのアウトプットの少なさを一つの原因として挙げている。言語聴覚士養成課程において重度障害児やその治療に関する正し

1) 高知リハビリテーション学院 言語療法学科

Department of Speech Language and Hearing and Pathology, Kochi Rehabilitation Institute

2) 高知リハビリテーション学院 理学療法学科

Department of Physical Therapy, Kochi Rehabilitation Institute

いいイメージを伝達することは、多様な職場で活躍できる言語聴覚士を養成するうえで必要なものである。

都築³⁾は教員養成系大学の学生に関して、「講義中心の授業では、現実感に乏しく、障害者の実情を把握しない段階で実践的教育を展開しても学生は講義内容を理解できないことが多い」と述べている。また都築は前述の対策として、肢体不自由、知的障害、聴覚障害、視覚障害のビデオを授業で活用することにより、「全体的に障害児をより能動的な存在として捉えるような傾向が示された」とも述べている。

本研究では、言語聴覚士養成課程における3年次で開講される「脳性麻痺」「拡大・代替コミュニケーション」の授業において、教員の行った脳性麻痺児と進行性筋疾患児に対する介入場面を視聴させることによって生じる学生のイメージ変化について検討した。

【方 法】

1. 対象

A県にあるB専門学校生C学科3年次生25名(男10名,女15名)。年齢は20~25歳(平均 21.23 ± 0.97 歳)であった。

2. 手続き

1) 視聴映像

視聴対象となる映像は、臨床経験20年以上の言語聴覚士が行った脳性麻痺児及び進行性筋疾患児の訓練場面である。脳性麻痺児(特別支援学校小学部)はアテトーゼ型四肢麻痺、全介助の状態、随意的に動かせる部位は左手であった。映像は模型のピザを訓練参加者に分ける課題であった。用いられた語句は名詞(お兄ちゃん,お姉ちゃん),形容詞(たくさん,すこし),動詞(ちょうだい,あげる)で、それぞれに相当する絵の描かれた絵カードを2枚提示し、「どちらにする」と聞き、左手で選択することにより語連鎖訓練(例:お兄ちゃん,すこし,あげる)をするものであった。映像の視聴時間は20分で、課題の達成率は、第1試行71%,第2試行82%

であった。

進行性筋疾患児(特別支援クラス)は、ウエルドニッヒ・ホフマン症候群。人工呼吸器を装着し、寝たきりの状態で、随意的に動かせる身体部位は右手人差し指のみであった。知的な問題はなかった。映像は、特殊入力マウスを用いてコンピュータでインターネットを利用する場面であった。文字入力にはコンピュータ画面上のオンスクリーンキーボードのキーを特殊入力マウスで操作していた。映像はまず、インターネットのYahooのトップ画面から始まり、文字入力、検索の順に進んだ。コンピュータ使用に十分慣れた時期であったため、入力ミス等はなかった。映像の視聴時間は20分であった。

視聴時の学生へは、脳性麻痺児と進行性筋疾患児の訓練映像について、対象となる子どもを中心にみるよう指示をした。

2) 印象評定(SD法)

脳性麻痺児及び進行性筋疾患児の訓練の様子を視聴する前と後で、障害に対するイメージの変化を検討することを目的としたイメージ測定用の評価用紙を作成した(図1)。測定にはSD法による形容詞対尺度構成を使用した。形容詞対の選定には、井上⁴⁾の日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度の概観より使用頻度の高い順に15個を使用した。

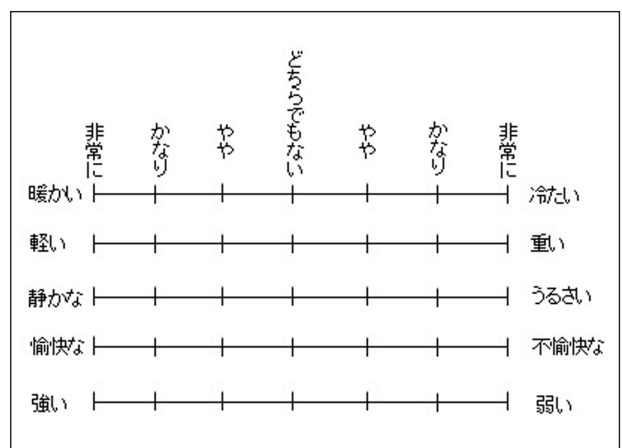


図1 イメージ測定用の評価用紙

3) データの統計学的処理

統計学的手法は、Wilcoxon 符号付順位検定とス

ピアマンの順位相関係数を用い、いずれも危険率5%を有意水準とした。

4) 倫理的配慮

学生には、授業時間内に、「障害に対するイメージ測定 of 二次利用に関する説明書」を提示し、口答で説明した。説明では、参加に関しては個々人の自由意思であり、データ利用を好ましく思わない場合は同意する必要がない旨を伝えた。そして、同意が得られた学生のデータのみを利用した。視聴映像の対象児及び保護者に対しては、書面と口頭で学生に対する映像の視聴許可、研究目的、研究内容に関する同意を得た。

【結 果】

1. 視聴前イメージと視聴後イメージについて (表1)

視聴前イメージと視聴後イメージでは、「陰気な-陽気な」「嫌いな-好きな」「苦しい-楽しい」「消極的な-積極的な」「不愉快な-愉快的」「弱い-強い」「激しい-穏やかな」「不活発な-活発な」「暗

表1 視聴前イメージと視聴後イメージ

	視聴前イメージ	視聴後イメージ	危険率
陰気な-陽気な	4(1)	5(0)	$p<0.01$
嫌いな-好きな	4(0)	4(0)	$p<0.05$
苦しい-楽しい	3(2)	5(2)	$p<0.01$
消極的な-積極的な	3(1)	6(2)	$p<0.01$
不愉快な-愉快的	4(1)	5(1)	$p<0.01$
弱い-強い	3(2)	5(2)	$p<0.01$
激しい-穏やかな	6(1)	3(2)	$p<0.01$
冷たい-暖かい	4(1)	4(1)	N.S
不活発な-活発な	4(2)	5(2)	$p<0.01$
醜い-美しい	4(0)	4(0)	N.S
悪い-良い	4(1)	4(0)	$p<0.05$
かたい-やわらかい	3(2)	4(1)	$p<0.05$
軽い-重い	4(1)	4(1)	N.S
暗い-明るい	3(1)	5(1)	$p<0.01$
うるさい-静かな	5(2)	4(1)	N.S

中央値 (四分位範囲) N. S: No Significant

い-明るい」「悪い-良い」「かたい-やわらかい」の11項目において有意差を認め ($p<0.05$)、視聴後は、「陽気な」「好きな」「楽しい」「積極的な」「愉快的」「強い」「穏やかな」「活発な」「明るい」「良い」「やわらかい」イメージが強くなっていた。一方、「冷たい-暖かい」「醜い-美しい」「軽い-重い」「うるさい-静かな」の4項目には有意差を認めなかった。

2. 視聴前イメージとイメージ変化量の関連について (表2)

視聴前イメージと視聴後イメージの差をイメージ変化量とし、視聴前イメージとの関連性を調べた。その結果、「嫌いな-好きな」「不愉快な-愉快的」「醜い-美しい」を除く全ての形容詞対において有意な負の相関を認めた。

表2 視聴前イメージとイメージ変化量の関連

	視聴前-変化量の関連	危険率
陰気な-陽気な	$rs=-0.77$	$p<0.01$
嫌いな-好きな	$rs=-0.64$	N. S
苦しい-楽しい	$rs=-0.56$	$p<0.05$
消極的な-積極的な	$rs=-0.78$	$p<0.01$
不愉快な-愉快的	$rs=-0.63$	N. S
弱い-強い	$rs=-0.59$	$p<0.01$
激しい-穏やかな	$rs=-0.64$	$p<0.01$
冷たい-暖かい	$rs=-0.88$	$p<0.01$
不活発な-活発な	$rs=-0.78$	$p<0.01$
醜い-美しい	$rs=-0.79$	N. S
悪い-良い	$rs=-0.86$	$p<0.05$
かたい-やわらかい	$rs=-0.83$	$p<0.01$
軽い-重い	$rs=-0.74$	$p<0.01$
暗い-明るい	$rs=-0.74$	$p<0.01$
うるさい-静かな	$rs=-0.62$	$p<0.05$

N. S: No Significant

【考 察】

言語聴覚士養成課程の3年次生を対象として、脳性麻痺児と進行性筋疾患児に対する介入場面を視聴させることによって生じるイメージ変化について検

討した。

視聴後、「陽気な」「好きな」「楽しい」「積極的な」「愉快的」「強い」「穏やかな」「活発な」「明るい」「良い」「やわらかい」のイメージが有意に強くなっていった。いずれもポジティブなイメージが強くなっていったことから脳性麻痺児と進行性筋疾患児に対する介入場面の視聴は、重度運動障害児に対するイメージを変化させる効果を有するものと考えられた。都築³⁾は、肢体不自由、知的障害、聴覚障害、視覚障害のビデオを授業で活用することにより、「全体的に障害児をより能動的な存在として捉えるような傾向が示された」と述べている。今回の結果は、これを支持するものと考えられた。

「冷たいー暖かい」「醜いー美しい」「軽いー重い」「うるさいー静かな」の4項目には有意差を認めなかった。これらの形容詞句は、治療場面のイメージとは関連が薄く、それが影響したものと推察された。

イメージ変化量と視聴前イメージとの間には、「不愉快なー愉快的」「弱いー強い」「嫌いなー好きな」「醜いー美しい」を除く全ての形容詞対において有意な負の相関を認めた。これは、ネガティブなイメージ

が強かった学生ほど、大きなイメージの変化があったことを示している。したがって、重度運動障害児に対する治療場面の視聴は、ネガティブなイメージが強い学生のイメージを変化させるうえでより有効なものと考えられた。

【文 献】

- 1) 青戸泰子, 平岩 恵: 障がい参観の変容に関する一研究ー障がいのある児童生徒との交流活動を通してー. 岐阜女子大学紀要43: pp77-86, 2014.
- 2) 稲田 勤: 重度身体障害者のコミュニケーションエイド上での感情表出に関する研究. 香川大学大学院教育学研究科修士課程学校専攻平成10年度学位論文: pp11-18, 1998.
- 3) 都築繁幸: 教育養成系大学の講義における視覚メディアの活用をめぐるー学生の障害者の態度変容に及ぼすビデオ映像の効果ー. 愛知教育大学研究報告9: 257-264, 1999.
- 4) 井上正明, 小林利宣: 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観. 教育心理学研究33(3): 69-76, 1985.